

保育の世界を豊かに

生きる子どもたち①

教える体験と教えられる体験

榎沢良彦

(大学教員)

幼稚園や保育所で行われている異年齢の子どもたちの交流は、子どもの発達にとって望ましい体験であるとして、推奨されている。しかし、この体験が子どもの発達に望ましい影響を与えるかどうかは、保育者がその体験をその後の子どもたちの体験にいかにつなげられるかどうかによる。そして、ある体験を後の体験につなげられるかどうかは、保育者がその体験の内実を理解できているかどうかによる。そこで、ある幼稚園での五歳児と四歳児の交流を取り上げ、その中での子どもたちの体験の内実を考えることを試みてみたい。その幼稚園では、五歳児がニワトリの世話をしており、毎年三学期の後半になると、四歳児にニワトリの世話の仕方を教えている。その時の様子が次のエピソードである。

五歳児と四歳児が対になって飼育小屋に向かう。五歳児たちは余裕のある表情だが、四歳児たちは硬い表情で緊張している。ただ、五歳児たちも、余裕があるとは言いながら、四歳

榎沢良彦（えのさわよしひこ）
 徳洲大学総合福祉学部教育福祉学科教授。
 保育の世界を当事者がどのように生きているのかを考え
 ています。著書：『生きられる保育空間』学文社。

児たちを氣遣つており、いつもとは違う様子である。飼育小屋に入ると、五歳児たちは自分の担当する四歳児に、いつのも作業をやつてみせる。担任のA先生は危険がないか見守りつつ、適宜、話しかけ、助言をし、注意を促す。五歳児たちはすべての手順がわかつているので要領よく作業をし、四歳児に氣も遣う。一方、四歳児たちはどの子も緊張した様子である。何をどうするのかわからず、教えられることを一つ一つ一所懸命にやろうとする。まず、五歳児たちが包丁で野菜を切つてみせる。片手を「猫の手」にすることを四歳児たちに示す。それに対して、A先生は「そうだね、猫さんの手だね」等と、みんなに聞こえるように言う。四歳児たちは緊張した面持ちで、教えられた通りに包丁を使う。一通り餌の準備が整うと、五歳児たちが容器に餌を入れるのを四歳児たちが見ながら、互いに見合い、少しほほを緩ませる。ようやく、少し緊張がほぐれたようである。A先生が飼育小屋の中に餌を置き、子どもたちは小屋の外からニワトリが餌をついばむ様子を見つめる。四歳児の一人が、「すごい、食べてる」と、驚いたように言う。

このエピソードでは、五歳児と四歳児の在り方は対照的である。五歳児たちはいつものように余裕がある。しかし、彼らには「餌の作り方を四歳児たちに教える」という仕事を与えられているので、それを果たすべく行動しようとする在り方をしている。その点では、いつもと違う構えをとつていえると言えらる。にもかかわらず、五歳児たちが普段と変わらなく見えるのは、作業の内容と手順について熟知し、時間的見通しを持つているからである。その見通しは、餌作りの作業を実行するという体験を繰り返し積むことにより、得たものである。

体験に基づく見通しは、実際に作業を実行できるといふ自信に裏打ちされた見通しである。それ故、五歳児たちは余裕を持てるのである。

一方、四歳児たちはこれまでニワトリの世話をしたことがない。それ故、これから行う作業の内容も手順もわからず、時間的見通しが持てない。従って、彼らはただ教えられることを一つ一つこなす以外にはないのである。しかも、この作業は、「ニワトリの餌を作る」という目的を達成する仕事である。そのため、四歳児たちは「教えられる通りにこなさなければならぬ仕事」として、責任感を持ってこの作業を受けとめることになる。遊びではなく、成果が問われる仕事をこなさなければならぬということが、四歳児たちを緊張させるのである。

ところで、五歳児たちは見通しを持って行動しているとはいっても、この日の餌作りには、いつもとは違う意味を感じている。いつもは、五歳児たちは「ニワトリの世話」という目的のためにすべての作業を行う。しかしこの日は、その目的だけではなく、「四歳児たちに作業の手順とやり方を教える」という目的も担っている。つまり、五歳児たちは二重の目的を持ってるのである。従って、彼らは熟知した作業を間違ひなくこなすだけではなく、それが四歳児たちにもわかるように、いわば模範を示さなければならぬのである。そのため、五歳児たちは、いつもなら習慣的に実行する行為を主題化し、その行い方を自覚しつつ、作業を進めなければならぬ。つまり、五歳児たちは「自分の行為を遂行しつつ、その行為を主題化（反省）する」という在り方をするのである。そして同時に、四歳児たちを気遣う。なぜなら、「教える」という行為は「相手に配慮し気遣いながら、相手と共にその行為を生

さること」だからである。例えば、四歳児に手を添えて包丁を使ったり、そばで見守ったりする。このように、五歳児たちは、次に行う行為を自分自身の行為としてだけではなく、四歳児の行う行為としても考えるのである。

以上のように、五歳児たちは二重の目的を持っているので、作業が終了すると、「ニワトリの餌を作り終えた達成感」と「教える責任を果たした達成感」とを覚える。この二つの思いを抱いて、五歳児たちはニワトリが餌をついばむ様子を見つめるのである。彼らの目に映るニワトリの姿は、いわば責任を果たした誇らしさをも示しているのである。

一方、四歳児たちは五歳児たちに助けられながら、責任感を持ち、それ故、緊張しながら餌作りの作業をこなしていく。それが終了した時、四歳児たちは一気に緊張感から解放され、「初めての作業を無事にやり遂げた達成感と安堵感」を覚える。それはいつもの自分に戻ることを意味する。いつもの自分に戻り、四歳児たちは、改めてやり遂げた行為を「ニワトリの餌作り」としてとらえ直し、ニワトリに注目するのである。こうして、自分の行為とニワトリを結び付けてニワトリを見る故に、感動の声も上がるのである。それは、これ以降、四歳児たちにとってニワトリが特別な意味を持つて存在するようになることを意味している。

以上のように、子どもたちの「教える―教えられる」かかわりには、知識や技術の授受を越えた内容が含まれていることがわかる。教える立場の子どもと教えられる立場の子どもとは、かかわりにおける体験の内実は異なっている。しかし、それは子どもたちが真剣に生きた体験である。それ故、それは少なからず子どもたちの生きる世界の様相を変え、子どもの生をより豊かにするのである。